

研究余滴 宇万伎の古道論

飯倉, 洋一
九州大学助手

<https://doi.org/10.15017/10466>

出版情報 : 文献探究. 16, pp.73-75, 1985-09-25. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

研究余瀆 宇万伎の古道論

飯倉洋一

明和四年十一月十八日付宣長宛書簡で、真淵は宇万伎を推賞して次のごとく述べた。逝去のおよそ二年前のことである。

ここにも藤原宇万伎（加藤大助といふ大番与力也）わが流を伝へてことに古事記神代の事を好めりいまだ其説は口をひらかねど終にはいひ出べき人も向來御申合候而野子命後は御此事をばたし給へかしと願事也（『縣居書簡統篇』所収）

死期間近しとの自覚あつた真淵にとつて、宇万伎は宣長と並んで自ら果たせなかつた『古事記』研究大成の夢を托すことのできる有かな学徒であつた。だが、宣長の華々しい業績とは対照的に、今日見ることのできる宇万伎の古代研究の成果は甚だ少ない。

お茶の水図書館成實堂文庫に伝わる宇万伎書入れの『日本書紀』（寛文九年版大本三十卷十五冊）は、彼の緻密な研究態度を看取しうる好資料である。第十五冊末に識語二条。その一は、『日本書紀』自神代至持統天皇紀三十卷得荷田東函荷田在満子考訂之書而枚合焉室曆十年庚辰秋八月八日藤原宇万伎。その二は、『安永四年』木浪華にして契沖法師が手つからかうかへた、せる書を得てなほかうかへあはせてしるせし也ふつき十二月をほりぬと。すなわち、室曆十年に荷田二氏の、安永四年には契沖の考訂本を得て、自説をも書入れた、いわば私家版諸注集成であつた。本文中には、『日本書紀口訣』、『日本書紀纂疏』をはじめとして、松下見林、天野信景、鴨祐之、上田秋成等の諸説が細かく書入れられている。少なくとも四十一歳から五十五歳までの十五年間、この本は宇万伎の座右の書であつたと思われる。

真淵の期待した『古事記』研究については『古事記解』三冊（『唐棗諸家著述目録』）の書名が伝わっているが、その内実はまだ明らかではない。ただ、安永六年六月十日の死去の直前、すなわち同年四月二十九日、病臥の宇万伎は宣長に『古事記伝』草稿の借覽を申入れている。その書簡（『心の花』十七巻四号、ただし引用は『本居宣長稿本全集』二による）に、

然處承及候得ば、足下古事記伝御著述被成候由、古事記之義は僕事も夕年冥に心を入候て、漸此一兩年已来少々見當心を得候様に覺候事も有え候。やがて書集も仕度候處、去々年より之病氣にて一向一紙も認不申、心に少しづつたくはへ置候耳に御坐候。此まゝにて死去も仕候はゞ地下之遺恨此事耳と奉存候。

と、『古事記』研究への執念を綴っている。書簡にいう「此一兩年已来」とは、先引『日本書紀』識語にいう「安永四年七月」以後と考えてよいだろう。古代研究の基礎固めとしての『日本書紀』研究に一応の区切りをつけ、いよいよ『古事記』の本格的な研究に着手した矢先の病氣だつた。宇万伎の無念さは推して知るべしである。

宇万伎が古代研究に並々ならぬ熱意を注いだことは、以上で十分窺い知ることができるとすれば、「わが流を伝へると真淵自らが保証する宇万伎の古道論が、真淵のそれをどう継承したかは、甚だ興味深い問題である」とはいえ、資料は乏しい。ここでは、本誌前号拙稿で取りあげた天理図書館蔵『静舍隨筆』の第二問答における宇万伎説の分析を通し、その一斑を探ってみる。なお、『静舍隨筆』の概略については前号拙稿を参照されたい。

末尾に「右明知元年九月しるす」と年次のあるこの問答は、同性聚婚についての「ある人」の問いに答えて、宇万伎が古道論を闡陳したものである。尚古主義批判の立場からなされる「ある人」の問いとは、「古代尊」というけれども、古代人が、同姓はもとより妹

さえをも妻とするのは人倫に反している。爾後、中国の聖人の教え
采りて、人々ははじらいを知り、今ではそういうことはなくなつた。
それでも古代尊重というのか」といふもの。對する宇方伎の回答は
次のごとし。

まことに皇朝のいにしへはしかり。しかハあれとも、はらから
たはくるハ天に罪あること紀にもしるしつ。ことハらなるハ右
にも立給ひしなれハ、いまさりしなりけり。これぞあめつちお
のつからの道なりけり。

同姓聚婚といつても同母兄妹の結婚は禁忌である。しかし腹違いな
ら構わない。それは天地自然の道に適っているからだ、というこの
説は、明らかに真淵の考え方に基礎をおくものだった。『国意考』
に言う。

同姓をめとらずといふを、よしとのみ思ひて、此国は兄弟相通
たり、獸に同じといへり。天の心にいつか鳥獸にことなりとい
へるや。生とし生るものは、皆同じこと也。暫く制を立るは人
なれば、其制も国により、地によりこと成るべきことは、草木
鳥獸もこと成が如し。然れば其国の宜に隨て、出来る制は、天
地の父母の教也。此国のいにしへのはらからを、兄弟とし、異
母をば兄弟とせず、よりて、古へは人倫の直ければ、はらから
通ぜしことほなく、異母兄弟の通ぜしは常に多し。たま〜
はらからの通ぜしをおもきつみとせし也。

人間の自然の人情に從つて古代の制は「天地」の教えであり、同姓
結婚も異母兄妹ならば非難するにあたらぬ、とする真淵の思想は
そのまま宇方伎に継承されている。

しかし、「あめつちのおのづから」に從つてという認識の論理化に
ついて言えば、真淵と宇方伎との間には若干の相違がある。右の引
用部にも見えるとおり、手に「天地の父母の目より、人も獸も鳥

も虫も同じこと成べし」(『国意考』)と述べるごとく、真淵は人
間を鳥獸と同じく森羅万象の自然の中に還元する。そしてそれが体
現されていた古代を尊び、人智の教えである儒仏の道が入つた後代
に否定的である。

凡世の中は、あら山、荒野の有か、自ら道のひろがりて、おの
づから、國につきたる道のさかえは、皇いよくさかえまさん
ものを、かへずぐ、儒の道こそ、其國をみだすのみ、こ、
をさへかくなし侍りぬ。然るをよく、物の心をもしらず、おも
てにつき、たがの道をのみ貴み、天が下治るわざとおもふは、
まだーきことなり。(『国意考』)

真淵のいう「おのづから」の道、すなわち「神代の道」は「儒の道」
に對置されることによつて、一種の規範性を持つことになつた。
彼の古道論が宣長・篤胤の神道思想の基礎となつたとされるのも、
「道」の規範性を可能性として内在していた点にかかつてゐる。

しかし、宇方伎の「おのづから」の認識は規範よりも現実を志向
する。後代には同姓聚婚が忌避されるようになったという歴史の現
実をふまえて、問者が「しからばいにしへのならひをよしとし、今
のいむなるを、おのづからにたがひてありとせんや」と質すのに對
して、宇方伎は、次のように述べる。

あらず、いにしへは古しへにしてよし。今はいまにしてあり、
(原文のママ、傍に「よし歎」の朱注あり)。いかにとなれば、
あめのます人の心はやかて天つちの御こと、る也。をへねと、
世こそりまことほらなりとていもせとるものやハある。これ
おのづからのならはしなす、今の世にして、千たりにひとりそ
むくものあらハ、必天津罪國つゝみをえて、身もほろひぬへし。

右の冒頭部分を秋成が『呵刈霞』下篇に引いたことは周知の事実だ
が(中村孝考「宇方伎と秋成」『山辺道』第四号、のち『著述集』

第十二卷所収)、¹⁰ 呵利霞曰の神論争で顕在化した宣長と秋成の思想的対立は、遡れば、真淵と宇万伎の認識の相違に至ると言っても失当ではないだろう。

それはともかく、石のごとき宇万伎の現実主義的歴史認識を可能にしたのは何であつたか。それは彼が「おのづからの道」をきわめて具体的な要素、すなわち「ならはし」と「人々のこのみ」に還元したところに求められよう。問者の「さらばことほりをとはず、いかにあしむまなる事有ともあらためず、そがままにおこなふを道とすべくや」という質問に、宇万伎は「しかなり。よしといはむもあしといはむも其もとほふたつはあらで、たゞならはしと人々のこのみによるのみ」(傍点飯倉、以下も同様)と明言する。そう規定することによって、後代に入った教えといえども、それが人々の「このみ」に合致し、「ならはし」として定着すれば、立派に「道」であるという論理が生じるだろう。火葬についての彼の言及にそれを見てとることができる。

人死すれば焼てはふるはひとの国のならはしなり。教のためにとわりをまうけて、そをすらしといへハ、聞うる人ことわりをめて、このむ心から、こゝにしもつたへて、やかてならハしなしぬれハ、親をたに焼はふりてよしとおもへり。

その宇万伎とても、儒道を「をしへのみにつくれる道」と規定し次のごとく述べる。

なへてをしへのみにつくれる道ハ、ことわりハざるものから、人の才より出て、あめつちの道にハたかふもあれハ、つひにハおこなはれずして、其みち必くつる、くつるにいたりてハ、かへりてさまたけとなれる事いとおほかなる、たゞ天つちのなりのまに／＼おこなふ道ハ、くつる、事なく、そむくものなし。しかし、これは「をしへのみにつくれる道」が全て「あめつちの道

」に反するという論ではない。反する場合もあり、その場合は結局崩壊するだろうというのである。宇万伎はより具体的に、そのような教えは「ならはしを改め、今より後の人に守らせんと、かたく法をたてたものだと説明する。

その立脚点を「ならはし」あるいは「人のこのみ」に置くことによって、宇万伎の「おのづからの道」は、古代の絶対化をまぬかれたのである。

本問答の主題である古代における同姓聚婚についても「うからいもせとなるもならはし、のまなり」と、「ならはし」と捉えることによって肯定していくのである。しかし、その際注意すべきは、同姓聚婚はまるで鳥獸と同じだという批判に対し、真淵は、人間も鳥獸と変わらないという思想を前面に押し出してくるのに比べ、宇万伎は「はらからはまたくおなしたくひなれハ、鳥獸の如みあひせざりしも、人にそなはりしおのづからの道」と、むしろ人間を鳥獸と区別し、血縁同士の結婚をしないという倫理的側面を「おのづからの道」として強調する。その上で「おのづからのならはし、のまにしてことわりをいはざるぞ、いにしへの道にしてたふとかりけり」と、古代を讃仰するのである。基本的には真淵の古道論を継承した宇万伎が、儒教批判に向かわったのは、古しへの道に備わる倫理的側面を見逃さなかつたからであつた。